



**NO FENCE**

(NO FENCE IN NORTH KOREA)

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203 TEL&FAX 03-3262-7473 <http://nofence.netlive.ne.jp> 【郵便振替口座】 NO FENCE / 00180-1-707147

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」

会報 かいほう / ノーフェンス

# NO FENCE

やさしい気持ち、人の痛みを感じる気持ち、誰もが本来持っているそういうものとわたしたちは出会いたい。

**2**  
2008年11月



### ▶主な記事◀

- 東京国際会議案内 ..... 1
- 心を起動させないしぼりとは? ..... 小沢木理...2
- 書「Are They Telling Us the Truth?」の挿絵 ... 4
- [基礎知識] <2>  
強制収容所は徹底して秘匿 ..... 小川晴久... 5
- 共産主義と強制収容所(その2)  
『北朝鮮 地獄からのレポート』を読む ...小沼堅司...6

### 世界人権宣言60周年記念 北朝鮮強制収容所廃絶国際会議

アムネスティ・インターナショナル前理事  
元国連人権高等弁務官、人権・国際法学者

**米国からD・ホーク氏を、  
韓国から体験者らを呼んでの  
有識者**

### 国際会議

(日時) 12月7日(日)

開場: 9:30

開演: 10:00 ~ 16:30

(会場) YMCAアジア青少年センター スペースY

(主催) NO FENCE

\*詳細はチラシをご参照ください。

そのツッヘンバルトは生きています！  
日本から飛行機で三時間の北朝鮮の山の中に。  
ナチの収容所は十二年(一九三三年〜四五年)で終わった。しかし北朝鮮の収容所は四十一年以上(一九六七年〜今日)続いている。実態は同じなのに、なぜこうも違うのか。

ドイツのツッヘンバルトは終わったのに、北朝鮮のツッヘンバルトは多も続いている。なぜこうも違うのか。

否、同じである。ドイツのツッヘンバルトも、当時は世界から見放されていた。世界は黙っていた。その点は同じなのだ。

その苦い教訓から学んで、北朝鮮のツッヘンバルトを知ろう！一九三九年のツッヘンバルトの(内側からの)声に耳を傾けよう。同じ声が北朝鮮の山の中からも聞こえてくる。

同時に、声を聞かなくては、  
こんなひどい収容所を早くなくす青写真を作ろう！  
北朝鮮の核をなくす三段階方式を、強制収容所廃絶にも設けよう！  
D・ホーク氏の提唱を受けて、収容所の凍結、不能化、廃絶の青写真を！

今年の世界人権宣言が出来て60年。それを記念しつつ、来る十二月七日(日)に、ドイツと北朝鮮のツッヘンバルトの声を聞くために、それを廃棄する青写真を作るために、NO FENCEは、小さな国際会議を開くことにした。集まろう！

ツッヘンバルトは生きています！  
歴史の教訓を生かし、北朝鮮収容所問題の解決を！  
北朝鮮の山の中の六つの強制収容所、約30万人の人々が奴隷のような強制労働を強いられている。裁判もなしに、刑期の期限もなしに、働かされて殺されていく。

ナチの収容所はガス室を持つ絶滅収容所と働かせて殺していく強制収容所の二種類があったが、北朝鮮の収容所は後者と同一である。

一九三九年英国政府が発表したナチの残虐性に関する白書が、それをはっきり示している。

ツッヘンバルトは後者の収容所であるが、ツッヘンバルトはぶなの森という普通名詞である。ぶなの森の中に作られた強制収容所ツッヘンバルトは1937年から38年にかけて作られたが、その実態が1939年に前記白書で明らかになった。ぶなの森(Buchenwald)という普通名詞が恐ろしい強制収容所の名前になった。

## 12・7 東京国際会議案内

(NO FENCE主催)

世界人権宣言60周年記念

# 心を起動させない縛りとは？



おざわもくり  
小沢木理



## わからないこと

様々な考えや意見、それは尊重されなければならない。当たり前のことである。

その前提の上で、日頃感じている疑問について書いてみたい。

北朝鮮では、ごく一部の層を除いて、国全体が飢餓に貧している收容所そのものと称す人もいる。さらにその深い山奥には、巨大な強制收容所がいくつもある。

しかし、今の日本に於いては、どうも北朝鮮の人権問題に触れることは、タブーのようである。それもとりわけ強制收容所の問題に触れることは、さらに周囲を寡黙にさせる。

北朝鮮の人権問題を隣国のこととしても、ひとりの人間としても無視できないのだが、

「なぜ、あなたはその問題を取り上げるのか？」

「どうして、その問題に触れるのか？」

「そのテーマを取り上げること自体、理解できない」  
そういった強い抗議の声を直接、或は無言で沢山いただいた。

私は賢くないので、その真意を理解しようとあれこれ考える。

この問題に言及することのどこが間違っているのか。人道に反する行為になるのだろうか。何がいけないことに繋がるのだろうか、と無い頭を振って考えた。

世界の国々で起きている人権侵害に敏感な人たちも、北朝鮮のことでは、電源が切れたかのように全く感応しなくなる。このことが、私ごとき者の頭では未だ理解できないでいる。

「一切、言及すべきでない！」のか、「隠れたところで噂程度にしておけ！」というのか、人々はなぜ、北朝鮮の人権問題に触れることをタブー視するのか、この疑問を以下の『共同提言』からも探ってみたい。

## 『共同提言』では…

雑誌「世界」2008年7月号の、特集“対北朝鮮—いまこそ対話に動くとき”に、『共同提言 対北政策の転換を』という和田春樹氏ら12名による共同提言文が掲載されている。

この号では、他に15名の著名人による原稿も掲載されていて、北朝鮮問題にどう取り組むべきか、私はこう考えるといったテーマで様々な意見が展開されている。しかし、今回は、12名の識者によって集約された『共同提言』に絞ってその感想を述べたい。

主張の流れは、①.日朝国交正常化の必要性 ②.日朝国交正常化の課題 ③.これまでの国交正常化の努力

の評価 ④.日朝国交正常化の考え方、方法と行程 ⑤.まとめ」となっている。その具体的な要点はおおよそ以下のようである。

＜本文中の（ ）は、筆者の挿入＞

- ① 北朝鮮と“国交”を持たないのは日本だけである。
- ② 日本は36年間植民地支配をしてきた。
- ② 植民地支配の清算がいまだ終わっていない。
- ③ 日本は北朝鮮と全面的な関係遮断状態だが、このままで良いはずが無い。過去の歴史を清算し、日本のありかたを変えることが不可欠。
- ④ 日本の反省と謝罪が日朝国交正常化の第一課題。
- ⑤ 1950年朝鮮戦争が、米中戦争と発展した際、占領下にあった日本は米国に協力した。そのことから生まれた敵対と緊張関係の終息が、日朝国交正常化の第二課題。
- ⑥ 拉致問題では、（日本は）北朝鮮の犯罪的行為には謝罪と回復を求めた。（それに対し）02年、北朝鮮は日本の総理に拉致等の事実を認め謝罪した。5人（拉致された）の現状回復が実現し、その家族も帰国した。なお残る未解決部分の解決を求める。
- ⑦ 在日朝鮮人の人権問題
- ⑧ 核兵器開発問題の解決は、日朝国交正常化の第三課題。
- ⑨ 二度にわたる小泉訪朝で、拉致被害者5人とその家族4人を日本に帰国させた。しかし、（日本は、拉致被害者を再び）北朝鮮に帰国させるという北朝鮮からの要求を最後通牒的につきつけるなどし、遺骨問題の疑惑等もあって、日本が食料・人道援助を打ち切り、被害者全員の帰国を要求した。
- ⑩ 拉致問題解決のための経済制裁措置や、在日朝鮮人・団体への圧迫で、日朝間関係がこれほど敵対的になったことはなかった。政府と国民は根本的に日朝間の考え方、進め方を考え直し、改めるべし。
- ⑪ 核開発問題を含め、日朝国交正常化には、外交と友好協力しかない。国交正常化条約の締結、経済協力の開始から完成迄の長いプログラムを考えなければならない。
- ⑫ 拉致問題解決のために、北朝鮮は既に基本的な認識、謝罪、将来への誓約を行っていることを日本は認めなければいけない。被害者の原状回復という核心措置も、すでに相当程度実施したことになる。この問題も、国交正常化の過程で交渉し、段階的に目標を達成するというのが現実的だ。
- ⑬ 日朝交渉のためには、制裁解除を。重油供給開始や食料援助再開を早急に。⑭ 在日朝鮮人への圧迫中止を。
- ⑮ 歴史清算問題では、国交樹立以前の措置として、個別被害者への措置が必要。⑯ 日本が、拉致問題ばかりに目を奪われた外交から脱し、日朝交渉を軌道に戻すこと。2010年迄に日朝交渉正常化条約の調印を成し遂げる必要がある。日朝交渉の進展と六者協議の進展をはかるべし。



## 『共同提言』でいう“国交”とは

ここに書き出した要点だけをザッと読む限り、いくつかのずれや反論、違和感を除けば、日本がきちんと歴史問題を清算していないということ、その措置を真摯に進めて行く姿勢が見られないこと、在日朝鮮人への不当な圧力は断じて止めること、一刻も早い日朝国交正常化を望むこと、これらに異を唱える理由はまず私には全くない。

殊に、隣国北朝鮮の人々に与えた苦しみを思うと、それは何にも優先して謝罪と償いをすべきだという思いは強い。日本の拉致被害者・その家族の一刻も早い解決のためにも、この歴史問題の清算を具体化していくことは良い効果をもたらす可能性がある。

しかし、現実問題として、生命の維持すら困難な現体制下で、日本の支配により被害を被った方々の生存自体に非常な不安を覚える。仮に現存されていたとして、その方々本人に直接保障が届くかどうか疑問視して当然だ。いのちが虫つけら同然に扱われ、いのちの尊厳など考えられない状況下である。

この『共同提言』の全体を通して主張しているトーンというのは、「日朝国交正常化が必要。朝鮮と国交がないのは日本だけでそれは異常。なのに、日本は何をやっているのか。そもそも、北朝鮮はそこそこ約束を果たしやることをやっているではないか。日本は歴史問題の清算もしないまま、拉致問題を盾に日本の経済制裁などやっているとかがおかしい。制裁の解除、食料支援再開等を行い、日朝交渉を軌道に戻すべき。」といった太陽政策的なものになっている。仲良くすること、大きな心で接することは、誰もが望むことである。

しかし、交渉相手や置かれている立場によって、その判断の仕方は異なる。まして国家間となると、様々な計算や戦略が介在してくる。

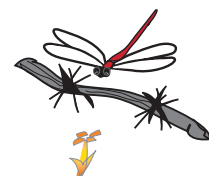
それに、そもそも“国交”とは、国民のいのちや幸福を脅かす国の元首に利することではなく、国民の暮らしや生活に利するためのツールである。支援は、国民を踏みつける独裁政治の元首にではなく、国民に実際に届ける支援でなければならない。太陽は、飢餓国民にではなく、いつもその国民の上に胡座をかいている国家元首をはじめとする上層幹部だけに当たるようになっていくという現実を、ちゃんと踏まえた上で提言すべきだ。“国交”を、独裁国家を助長する政治的道具にさせてはならない。

北朝鮮の国民の大半が飢餓状態化していることを報道で多くの方は知っている。

さらに、北朝鮮の山奥にある強制収容所の存在も、様々な形で証明され、否定できないものとして認知された。

しかし不思議なのは、この『共同提言』では、「国交すべし」としながらも“国交”という概念の中に北朝鮮の人々の存在は見えないらしい。

これら、北朝鮮の国民の実態や、その究極の極悪環境にある強制収容所の問題は、視界から消えてしまうのである。



## 「な・ぜ・か?」…

「な・ぜ・か?」…恐らくそれは、触れてはならないパンドラの箱、開けるとさらなる足手まといなものが飛び出してきて、始末に困るからなのかもしれない。優しい心、正義感、純粋な心を持つ人たちから、何度も「過去の日本の犯した罪への謝罪とその償い」が語られる。それは、何度も繰り返し語られ、反芻すべきだと私も思う。「で、その先は無いの?」優しい心、正義感、純粋な心を持つ人たちには、その先はないのだろうか。「えっ?それで終わり?」

日本の過去の歴史の清算が前提で、それが終息しなければ、それらの人たちは、隣国で起きている悲惨な現実に重い石でフタをして知らん顔してしまうのだろうか。

私には、その静寂さがとても怖く不気味に思える。電車内で痴漢や暴行に遭っているとき、その車内にいながら何事もないように平静なままでいる乗客の姿と重なる。

こんな時にあっても、まだそれ以上に大事な“何らかの手順が必要”、と手をこまねいているのだろうか。しかも、知識人、それも様々な機会に人権問題に関心を寄せている人たちでさえ、この『共同提言』では、北朝鮮の人権侵害問題だけきれいにぎ取っている。

『共同提言』で、朝鮮半島や北朝鮮の国民に触れている部分があることはある。「日本は古来より朝鮮半島から様々な文化的恩恵を受けてきた。」また、「北朝鮮の世論調査で、日本人が一番嫌いとされている。……このままではよいはずがない。隣国を理解しようと努めること、その苦難に心寄せること、飢えていれば助けること、敵対と緊張をつくり出す要因を取り除くこと、核ミサイル開発配備をやめさせること、拉致解決を進めること、…」とも書かれている箇所がある。しかし、逆に言えば、この国の真の主権者である国民の実態に心寄せる記述は、14頁の中でそれくらいしかない。

この『共同提言』では、「国民の生命を簡単に抹殺してしまう独裁者を黙殺し、そして積極的に北朝鮮の主張に協調性よ。」と暗に言い、それを“国交”と置き換えているようにしか私にはとれない。

国家間の交渉は、実際には、あらゆる計算の上に行われるのだから、様々な戦略や妥協というものが存在することは容易に分かる。

それにしても、国家でない市民がまとめたこの『共同提言』は、北朝鮮の幹部の人物が書いたのではないかと思えるほど、北朝鮮の現実をきれいに省いて書かれている。それがとても不可解で異常に感じる。

この『共同提言』の趣旨は、拉致被害者や、帰国事業で集団拉致された約10万人の在日朝鮮人や日本人家族が陥っている人権侵害については、深く、または殆ど触れてはならず、北朝鮮の立場に軸足を置いて、日本に国交正常化の進展を促しているように読める。

しかしそれが人道的に前向きな“国交”であれば、勿論日本にもプラスとなるであろうし、過去の清算にも繋げていく可能性が出てくる。

だが、その是非以前に、今の北朝鮮の擁護に軸足を置いていてと解せるこの『共同提言』の精神に、本当に北朝鮮の平壤以外の人々への友愛があるのだろうか。国交正常化を促す『共同提言』のどこに、どれだけ北朝鮮国内の人々の実態への記述があったらだろうか。何より、北朝鮮の人々がこの国家元首によって苦しめられているのに、そのことには意識的にか殆ど触れず、統制政治が行われているそのままの北朝鮮を、日本が受け入れないことの方が間違っていると云わんばかりの記述の色が濃い。

仮に現状をそのまま受け入れるなど、政治的な交渉のやり方はいろいろ存在はするが、その政治的手法を理由として、日本では北朝鮮の人々の現実を認識する機会さえ排除するというのだろうか。それでは、私たちは、現独裁政治をそのまま容認し共同歩調を取る非民主主義的行為を選択することになるのではないか。今の北朝鮮国内で今日的に起きていることは、日本が関与して起きたことではない。国交が樹立していない。そういう理由から、現在の北朝鮮の人々のことを触れることさえしないのだろうか。

日本の人権問題に関わる人々は、そのことをどう考えるのだろうか。

真に北朝鮮の人々のことを思うのなら、日本による過去の歴史の事実にも心痛むなら、北朝鮮国内で絶望の中にいる人々に心を寄せて欲しいと思う。

そして、しっかり強制収容所の実態に、目を、心を開いて直視して欲しい。

北朝鮮との国交正常化を願う心があるなら、北朝鮮内にある最大の人権侵害が行われている実態を直視して欲しい。

## やっぱり分からない

もし、それでも、「あなたは、なぜそんな北朝鮮の強制収容所のことを話すのか」「なぜ、その問題を取り上げるのか」「そのテーマを取り上げること自体、あなたはおかしい。」と言うなら、そういう人たちの心とはどんなものなのであろうか。

今年(08年)10月半ば過ぎ、「日朝国交促進国民協会」の事務局長として和田春樹氏らが訪朝。北朝鮮外務省の意向を確認してきたという。国交を正常化したいという思いはよく分かる。

しかし、お隣、北朝鮮の強制収容所に有無を言わさず収容されている人たちが、毎日が死と隣り合わせの中で呻吟している。しかし、その問題はきれいに黒い布をかぶせられている。この恐怖政治の事実について、ひとことも触れないでいられる人権問題に関心のある人たち、その人たちを呪縛している思想とは一体何なのか、その心を起動させない縛りとは何なのか。

「北朝鮮国家による国民への残虐な行為やその実態に言及することや、北朝鮮を刺激することは、日本の歴史的清算の障碍になる。だからどれほど多くのいのちが無惨に奪われ、いのちの尊厳が踏みにじられても、それらは無いことにする。」とでも言いたいのだろうか、人権問題に関心のある人たちは、なぜそう平気でいられるのだろうか。

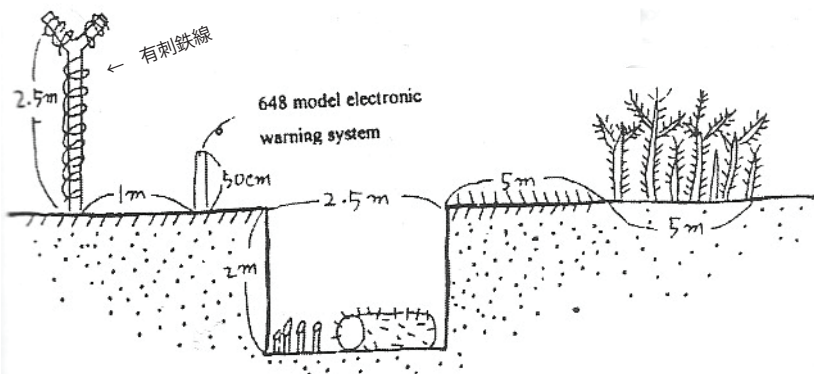
この『共同提言』は、12名の知識人によって出されたひとつの見解である。

ただ、このように詳細に朝鮮と日本の歴史を把握していながら、日本の姿勢を批判しながら、北朝鮮に対する熱い友愛を示しながら、そのこと以外は一切というほど、言及を避けている。北朝鮮による非人道的な行為で苦しめられている人々や、数十万人という人たちが強制収容所で簡単に殺されているという現実へ心を向けることを徹底して避けているのが、不思議でならない。

そしてやはりそれは“異常”としか私には映らない。人間のいのちの尊厳がこれほど迄に冒瀆されている現実、心を起動させないその縛りとは一体何なのか、そんな疑問に対して説明してくれる具体的なことばをまだ見つけられないでいる。



収容所  
人が近づくことの無い山の奥深い場所にそれはある。



収容所を囲っている電気の通じた有刺鉄線までも、歩くことも険しい環境と、沢山のワナが仕掛けてある。



イラスト:「Are They Telling Us the Truth?」の33・43より



〔北朝鮮強制収容所の基礎知識〕 <2>

強制収容所は徹底して秘匿



小川 晴久

私たちNO FENCEが一日も早く廃絶しようとしている北朝鮮の強制収容所(政治犯収容所)は、現在収容所体験者の証言や人口衛星写真で六つが確認されている。ところが北朝鮮当局は一貫してその存在を否認し続けている。北朝鮮当局がそれを管理所という名称で呼んでいるにも拘らずである。

北朝鮮当局が刑法で正式に認めている基本刑罰は、死刑と労働教化刑と労働鍛錬刑の三つである。労働鍛錬刑は2004年の刑法改正で新しく登場したが、それだけでなく、それまでの1999年制定刑法と比較するとき、顕著なちがひがある。基礎知識としてここから確認しておこう。

■ 〈労働教化刑と教化所〉

1999年の前刑法では「労働教化刑は、教化所に置き、労働をさせる方法で執行する。」「労働教化期間は、六ヶ月から十五年までとする。」(第24条)とあった。ところが現刑法では、労働教化刑が無期と有期(一年~十五年)の二つにされ、無期労働教化刑が新設されていることが注目される。ここに北朝鮮当局が一貫して否認している強制収容所の影を見てとることができる。前刑法では刑法上、死刑か長期でも十五年までの刑しか課せないことになっていた。それが無期労働教化刑の登場となったのである。

北朝鮮では、刑務所とか監獄という用語を用いない。教化所という。教化所とは刑務所のことである。

〈労働鍛錬刑〉

新設された刑罰は労働鍛錬刑である。

「労働鍛錬刑は、犯罪者を一定の場所に送り、労働させる方法で執行する。」「労働鍛錬期間は六ヶ月から二年までとする。」(第31条) この刑の新設は多様な犯罪の出現に対処するため設けられたことが、新刑法によって分かるが、「不法国境出入罪」は前刑法では三年以下の労働教化刑であったが、新刑法では二年以下の労働鍛錬刑になった。脱北者の増加に対処した措置である。労働鍛錬隊という名称は刑法には出てこないが、脱北者が連れ戻されて入れられる労働鍛錬隊は、新刑法第31条に基づくと云える。

ここまでが、北朝鮮当局が刑法で認める刑罰と

懲罰場所である。無期労働教化刑を最近になって新設しながら、山の中の強制収容所を北朝鮮当局はどうして認めようとしないのであろうか。

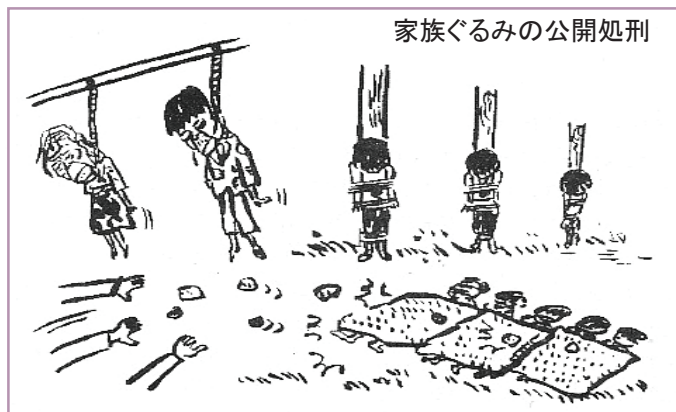
それは刑法や刑事訴訟法に反し、裁判もなしに家族ぐるみ恣意的につかまえ、外部と完全に遮断し、強制労働をさせて殺していく、そのような収容所が外部に知られたら、金日成の威信がいつぱんに失墜すると考えた息子の金正日が、徹底して秘密にしてきたからである。

〈秘匿される管理所〉

一九九四年に韓国に亡命した強制収容所元警備員安明哲(アンミョンチョル)氏は、韓国の総合雑誌『月刊朝鮮』一九九五年三月号に、自分が受けた警備員教育の内容、及び強制収容所の管理組織図を明らかにした。強制収容所は第何号管理所と呼ばれ、国家保衛部(秘密警察)七局(農場指導局)の傘下に置かれていること、「宗派(セクト)主義者、階級的仇どもはその誰であるかを問わず、三代を皆殺しせねばならない」(金日成教示)、「逃走は首領様の対外的権威と威信に関連する最も重要な問題であり、逃走した者は容赦なく殺してしまわねばならない」(金正日教示)など、とても重要な内容である。

階級の敵は三代にわたって皆殺しにせよという金日成の教示が、血のつながる家族全員の収容所送りの根拠であり、首領様の威信が落ちる云々が、強制収容所が徹底して秘匿され、当局が今日に至るもその存在を否認している根拠である。

強制収容所が一九七三年五月国家政治保衛部(一九八一年に国家保衛部、一九九三年に国家安全保衛部と改称)の管轄下に入ったことも重要である。それまで社会安全省(警察)傘下であった政治保衛局が国家政治保衛部としてこのとき独立したのである。強制収容所が独立した(金日成、のちには金正日(のみ直属の)秘密警察機関の下に入ったことにより、収容所の秘匿性は完璧なものになった。現在の北朝鮮の恐ろしい強制収容所は一九七三年に完成したことをも、このことは意味する。この年9月金正日は、党の組織、宣伝煽動担当書記となり、翌年の一九七四年「党の唯一思想体系確立の十大原則」(金日成の神格化、絶対化の集大成で、北朝鮮の実質的な憲法となるもの。金正日の手になるといわれる)が、登場する。



イラスト：「Are They Telling Us the Truth?」191より

## 共産主義全体主義と強制収容所 (その2)

体験手記や証言集

### — 『北朝鮮 地獄からのレポート』 を読む —

おめまけんじ  
小沼堅司



本書(河出書房新社、2002年3刷)は、韓国の最も影響力のある総合月刊誌『月刊朝鮮』に掲載された6本のドキュメントからなる。同誌に寄せられた体験手記や証言のなかから編集長・趙甲濟(チョ・カプチェ)氏が編集したものである。最初の2編は北朝鮮の最新(2000年)の飢餓地獄の凄惨な現実、次の2編は中国に脱出した難民の悲惨な実態、最後の2編は北朝鮮全体主義独裁制を支えるテロル装置の一つ、社会安全部の内幕を暴露する元幹部イム・キョンス(任慶秀)氏の秘密報告と、价川(ケチョン)14号管理所(完全統制区域収容所)から18号管理所(同)に移され、そこから奇跡的に脱出した元国家保衛部幹部・金龍氏の証言である。今回はこの金氏の証言「人間絶滅の現場—その血の記録」を紹介する。

### □ 金龍氏の経歴

証言者、金龍氏は数奇な運命を辿った人である。50年1月18日生まれの氏は、朝鮮戦争の最中両親を失い、4歳のときに孤児院に預けられた。両親のつけた名前は金ボンス。戦争孤児であったので金日成を父として党と首領に忠誠を誓う「革命の子」として成長した。4年間の軍務のあと6年間金策工科大学で勉強、80年に朝鮮人民軍489軍部隊元山出張所長(中佐)に配属、出世街道を駆け上った。

その彼に不幸の影が忍び寄ってきたのは86年のことであった。死んだとばかり思っていた母が突然現れたのである。しかも父は38度線を往来しながら綿布の商いをしつつ、米軍のスパイ活動をし、逮捕・銃殺されたという。母も新義州教化所(刑務所)送りになった。兄もこんな成分(身分)では北朝鮮では生きていけないと判断して韓国への脱出を計画したが、発覚して銃殺された。金氏は母や親戚と共謀して、道副委員長を務めた朴ポクトクと母の不倫関係で生まれたことにして戸籍を偽造した。この過程で1万ドルという巨額の賄賂を使ったという。金ボンスから朴ボンスへと成分(身分)優秀な家柄に化けた金氏は、社会安全部傘下で日本と海産物貿易を行っていた西海朝日株式貿易会社代理人(副社長)に栄進、目覚ましい成績を上げ、金正日(キムジョンイル)に36万ドルの忠誠資金を捧げて革命烈士証をもらった。この会社は金正日の方針により国家保衛部傘下に移管され、保衛部幹部に出世した。

93年5月、平壤の「金正日1号行事区域」に住んでい

る者に対する住民登録検査が行われた際、朴ポクトクの次男に対する検査で、捏造した身分(朴ボンス)が発覚、逮捕された。履歴をごまかして国家保衛部に潜入したとして金氏をスパイか反革命分子にするために自白を強要、激しい拷問が加えられた。

### □ 第14号政治犯収容所

93年8月、金氏は最も悪名高い国家保衛部である平安南道价川(ケチョン)第14号政治犯収容所(完全統制区域収容所)に収監された。国家保衛部に勤務していた彼は、一旦この収容所にぶち込まれたら生きて出てくることはできないことを知っていた。彼は配置された「無尽二坑」という炭坑でよろよろしながら労役に従事している囚人を見て衝撃を受ける。骨に皮をかぶせたように残酷なまでに痩せ衰えた人、石炭の粉塵をまぶした棒切れが歩いているような姿、事故で脚や腕を切断され、木で義足まがいのものをくっつけて片足をどうにか引きずりながら働いている障害者、数百回継ぎ足してボロ切れのむしろのようになった作業服。食事は1回分でトウモロコシ20~30粒と白菜の葉切れが浮かんでいる塩汁だけ。

「無尽二坑」の構造は、大きく口を開けた坑口とその隣り合わせの暮舎1棟、食堂兼洗面場、製材所、総合兼用室があるだけだった。収監者数はおおよそ300名あまりで、掘進組、準備掘進、採炭工、線路組、電車運転組、製材組、道発組などの任務に分けられていた。宿舎の入り口は鉄の扉で、外から鍵をかけられた。真ん中に通路があり、両側に3段の階段式木製ベッドが並ぶ。布団はなく、備品は箒1本と半分に切断したドラム缶の小便器のみ。暖房は石炭、老人が火夫で細い木のヘラで大便の始末をする。

炭坑の仕事は朝8時から12時まで、12時30分まで昼食をはさんで8時まで続く。作業計画が達成できなかった場合は、夜の11時まで続く。平均15時間の労働であった。それでもノルマを達成できないと給食を3分の1に減らされる「給食処罰」や暴行を受ける。手抜きをすれば、「党と人民に対して不満を抱いている害毒分子」として、殺される恐れがあった。炭坑では坑道崩落、鉱車の衝突、発破による崩落など死傷の危険があったが、栄養不足で免疫力のない囚人は、軽い怪我でも命を失うことが多かったという。

囚人は、相互の密告と監視に極度の警戒をしたという。また、3人以上が会話をすると謀議対象かクーデタ対象として過酷な処罰を受けるので、囚人同士で私語すらできない状況であった。相互不信と疑心暗鬼の毎日であったという。密告が盛んなのは、密告によって誰かを摘発・処罰すれば、たとえば豚や牛の飼料をつまみ食いできる牧場など、より条件の良い作業場に移してくれるからであった。

収容所は「死が日常化された場所」であった。さまざま死の光景があった。金龍氏は「いつ、どこで命を失うか分からない緊迫した状況の連続であった」という。14号収容所にいた2年間で、理由もなく保衛員に即決処刑された事例を15件、栄養失調と炭坑作業中の死亡、保衛員に呼び出されて再び返ってこなかった事例を25件ほど記憶していた。たとえば、

——石炭運搬車運転工・金哲民の場合。帰る途中、あまりの空腹に耐えかねて車を停めて落ちている栗の実



を拾ってしまったのを見つかり、軍靴で蹴飛ばされたうえ、「こいつはシャバに居るときから、党と人民の害毒分子だった。しかも『制度的反抗』までしやがって。こんな害虫は死んで当然だ」として、ピストルで射殺された。

——父親が地主だったという理由で入れられていたバスケット・ボール選手ガリー・ヨンの場合。保衛員が牛の尾で作った革の鞭を坑内に忘れていったとき、あまりの飢えに苦しんでいた彼は、これを水にふやかして千切りにして食べてしまった。それを知った保衛員は便所の回虫を「これも肉だから食え」と無理やり口の中に入れようとし、また「党と人民に対する反抗者」として激しく殴りつけたため、全身がぶくぶくに腫れあがって3日後に死んだ。

——新聞の切れ端を持っていて殺された辺哲宇の場合。14号収容所では煙草の支給がないので、野生の蓬(よもぎ)や落ち葉を細かく刻み、紙に巻いて吸う人がいた。人民軍出身の辺氏はポケット検査の際に掌ほどの新聞の紙切れを発見された。いくら殴られても出所を自白しなかったため、後ろ手に縛られ木に吊るされた。2日間野獣のように叫び、大小便を垂れ流しながら命を落とした。新聞紙はただの紙切れではなく、「世間の動静を探り、暴動を起こす陰謀のきっかけ」とみなされていた。



#### 金龍氏の証言—「収容所は無法地帯なの

です。担当保衛員の気分しだいで殺されます。だから、収監者は極度の緊張の中、髪の毛まで緊張させて暮らさなければなりません。」

また密告と監視、日常化された死の状況のなかで、囚人は悲しみや憐憫など人間的な感情を失う。再び、金氏の証言—「死が日常化しているところなので、人が死んでも何の感慨もわきません。ただ『また死んだか』とつぶやいて引きずって行き、適当な場所に埋めます。もし人が埋められた跡だという標識や墓などを作ったりしたら処罰されますし、死者に対するどんな同情も禁物なのです。」

暴力による死が日常化されていた14号収容所では、見せしめと恐怖心をあおるための公開処刑は行われなかったという。1990年に、囚人が公開処刑に憤激して保衛員8名を殺害する事件があり暴動鎮圧に機関銃を乱射して1500名を射殺、死体を廃坑に放り込んで収拾したそうである。この事件があつてから公開処刑は行われず、宿舍も。

鉄の扉にして外川鍵をかけるようになったという。かわりに秘密処刑が行われ、平均1ヵ月半ごと2人から5人ぐらいが呼び出され、戻ってこなかったそうである。

収容所で命を失うのは暴行、事故、処刑だけではない。ある意味で一番恐ろしいのは飢え死にであった。飢え死にする確率が高いのは、収容初期の新参者と老弱者であったという。

1回の食事の量はトウモロコシ25粒ほどとわずかな塩汁のみ。「初めの1年間がもっとも大変です。外の社会で食べていた習慣のせいで、急激に減った食事量の調整がうまくいかないのです。だから1年を越す前に飢え死にしたり、気力が失せて作業中の事故で死ぬということが頻繁に起きます。」

14号では、取って食えるネズミさえ死滅したのかいなかったという。たまに蛇や虫などを取って食べた

が、見つければ半殺しの目にあう。風呂はめったに入らないので不潔でシラミがうじゃうじゃ湧くが、それも肉だといって食べたという。極端な飢餓状況のなかでもっとも恐ろしかったのが、トウモロコシが3分の1の8粒から9粒に減らされる「給食処罰」であった。金氏も、あまりの苦しさに耐えかねて何十回も自殺を企てたという。しかし自殺は反逆罪として禁止されていた。「収容所は死ぬ権利まで剥奪している空間」であった。



## □ 18号政治犯収容所

95年10月、金龍氏は突然担当保衛員から呼び出しを受け、18号収容所への移監を言い渡された。18号は大同江をはさんで14号の反対側(南)に位置する。収容者数は働くことができる者3万人、子供と老人2万人、合計約5万人程度であったという。これは18号に収監されていて94年に韓国に亡命した姜成山北朝鮮首相の女婿・康明道(カン・ミョンド)氏の証言と一致する。収監者の大部分は地主出身、朝鮮戦争の際の治安隊従事者、韓国軍・米軍協力者、陰謀事件に連座した者、金正日とライバル関係にあった者と関わりを持つ者などであった。

収容所は炭坑だけでなく、セメント工場、陶磁器工場、養工場、食糧工場があり、学校もあった。12歳未満の子供がいる場合には人民班4年生までは母と一緒に過ごす、4年生になると分離され、以後家族の生死は分からないようにしてしまう。中学まで通わせ、強制労働に従事させる。凄まじい飢餓は14号と同じであるが、山に登って樹木の皮を剥いたり草や山菜を採取できるだけ、ましであった。だが、「春になると草の毒が強くなって、大部分の収監者は全身がぶくぶくとふくれ上がる」という。

金氏が18号へ移監されたのは、平壤から派遣された国家保衛部8局長・張吉男の説明によれば、ある国家保衛部高位幹部の力添えのおかげであったという。仕事も掘進工よりずっと易しい鉸車修理に配置転換された。教育室ではたまにラジオを聞かせたりやテレビを見せてくれたりした。また各作業場の入り口には労働新聞が掲示されていたので、世の中の動きも少しは伝わってきたそうである。そして18号には母が収容されたことを知り、40年ぶりに初めて同じ屋根の下で暮らすことになった。金氏が収監される時、母は強制離婚の手続きを強要され、その結果として連座制の適用を免れたために18号に分離収容されたのを知った。

連座制が緩和された理由について、安明哲(アンミョンチョル)氏(元「完全統制区域」収容所の警備隊員、『北朝鮮 絶望収容所』の著者)は「徹底的に連座制を実施した結果、政治囚の数が幾何級数的に増加し、収容能力が限界に達した」ことを挙げている。

金氏の18号収容所に関する証言には、いくつかの興味深い事実が含まれている。

—まず「革命化作業班」という地域の存在について。そこは中央党や国家保衛部、社会安全部、大使級など指導層幹部が「罪」を犯した際に収用されるところで、独房だそうである。他の収監者との接触を遮断するためである。

—「解除民区域」というものも存在していたという。これは、模範収監者を年に2名ほど、金正日や金日成の誕生日に労働から解除させ移住させる場所である。外出証をもらえば闇市まで往来する自由が与えられるという。日本からの帰国者で、以前はサッカー選手をしていた朝鮮映画記録所1号撮影技師・金明彬氏の場合、日本の親戚が党に70 80万ドルという巨額の献金をしたおかげで釈放され、以前の職場に復帰した。なお金龍氏は、1次、2次の帰国者の70 80%がスパイ嫌疑で収容されていたと証言している。

—「また黄長華(ファン・ジャンヨブ)氏(元朝鮮労働党書記、元最高人民会議議長、97年韓国に亡命)の婦人と息子を除いた一家・親戚と、江原道(道は日本の県に相当)党責任秘書の皮チャンヨン家族を合わせた105世帯が大挙収容され、18号収容所の中の険しいボムコル(虎谷)地域で厳重に監視されていたという。

—「女性収監者に関して。以前14号に勤務し、18号で「担当先生様」となった金栄一保衛員から、14号には「幹部招待所」というところがあり、平壤から来る幹部級に対して21歳から25歳の美人の女性収監者を風呂に入れて幹部にささげるということを聞いた。そして性的玩具として弄んだあとは、「逃亡分子」に仕立てて秘密裏に殺してしまう。それと同じように18号にも保衛部長・金ピョンハの大きな別荘があり、半分は酒工場、半分は妓生パーティの宴会場に使われ、外部から幹部がやってくると美しい女性が体を洗われ連れて行かれたという。とくに黄錦順という娘は別嬪で18号管理所長・姜昌賢の専門慰安婦のごとくであったが、ある安全員が強姦しようとしたとき抵抗したために殴り殺されてしまったというむごい証言は続く。14号よりましな待遇であいいという点では同じであった。18号ヨンドン坑地区では500あまりの世帯が住んでいたが、ここで人が死ぬのを目撃したのは80件くらいであったと記憶していた。餓死、鉤車による轢死、坑道崩落など「無残な死が日常化された地域だった。」

このような「日常化された死」のなかで、必死のテロ事件や金日成父子の肖像画を粉々に砕く事件、脱走の試みも頻発したという。家族のうちの誰かが脱走すると、捕まるまで家族全員が木に吊るされ、ほとんどが死んでしまうという。「公開処刑」もよく行われたという。「18号にいた3年間で30回以上見たと思いますが、頻繁に行われたから、よく覚えていません」と、金氏は証言する。そして死と隣り合わせに生きているので、公開処刑場にいっても無感覚になるという。また保衛員や安全員の射撃場が、高位幹部用の秘密処刑場に利用されている事実も明らかにしている。

金氏は後に、司令部打倒クーデタ陰謀の共謀者という濡れ衣を着せられ、拷問で半殺しにあったが、98年9月に18号収容所からの脱出に成功、12月に体力を回復して中国に脱北、翌年8月モンゴルに脱出し10月にソウルに亡命した。

## □ そして金龍氏は続ける

証言の最後に、金龍氏は「死の収容所についての私の体験記を、世界的な人権指導者の金大中大統領にささげたい」と語っている。「『まさか彼らも人間なんだから、同じ人間にそこまでやるだろうか』などというような言葉遊びにわれわれが明け暮れている間、北朝鮮の収容所では無数の人間が殴り殺され、飢え死にし、銃殺の処せられ、無駄に命を落としているのです。彼らがこれ以上、人権蹂躪にさらされないために、金正日に圧力を加えることが世界的な人権大統領の務めではないでしょうか。」まさにその通りである。怒りと悲しみの涙をぬぐいながら、取材をした『月間朝鮮』の金容三記者が引用したハイネの『ラザロの詩』を再録してこの紹介を閉じたい。

「なぜに正しき者が十字架を背負って  
血を流しながら道を往き、邪悪なる者が  
勝利者として意気揚々と駿馬にまたがっ  
てのさばるのか。」

★ NO FENCE では、翻訳や資料等のデータ入力していただけるボランティアを募集しています。

